

巻頭言

向かうべきは低炭素社会ではなく、
低エネルギー社会

小出 裕章 (元 京都大学原子炉実験所助教)

原子力は無限のエネルギー源、安価な発電方法、大事故は起きないと言われた。でも、ウランの地殻中埋蔵量は少なく、得られるエネルギー量で比べると化石燃料の数十分の一しかない。また、実際の経営データを使って計算すれば、原発の発電単価はもともと水力よりも火力よりも高かった。そして2011年3月11日、東京電力福島第一原発で破局的な事故（フクシマ事故）が起きた。つまり原子力推進の理由はすべて嘘だった。

フクシマ事故により東北地方、関東地方の広大な地域が、日本の法令を守るなら「放射線管理区域」に指定して人々の立ち入りを禁じなければならない汚染を受けた。事故当日、原子力緊急事態宣言が発令され、本来の法令は反故にされ、猛烈な放射能汚染地域から15万を超える人々が強制避難させられた。その他の汚染地には数百万人の人が棄てられ、被曝しながら普通に生活することを強いられた。その原子力緊急事態宣言は10年以上たった今も解除できないまま続いている。加害者である国と東京電力は誰一人として責任を取ろうとしないし、処罰もされていない。それをよいことに、彼らは今まで通りに原子力の利権から利益を得ようと、一度は止まった原発を再稼働させ、さらに原発を新設しようとしている。

彼らは、二酸化炭素が地球を温暖化させており、原子力は二酸化炭素を出さない優しいエネルギーだと言い出した。たしかに化石燃料を燃やせば二酸化炭素が生まれる。しかし、ウランを核分裂させれば、放射性物質を生む。二酸化炭素は光合成の原

料で、二酸化炭素がなければ植物は生きられない。当然、人間を含め動物も生きられない。一方、放射性物質は生命体にとって決定的な毒物である。火力発電が悪くて、原子力発電はクリーンだという議論は初めから間違っている。

原子力は鉱山でウランを採掘・製錬する時にも、それを濃縮・加工する時にも二酸化炭素を放出する。原発も、それを建設する時に膨大な二酸化炭素を放出するし、運転する時にも放出する。フクシマ事故の始末のためにどれほどの二酸化炭素を放出することになるのか、気が遠くなる。その上、10万年、100万年の管理を求める核のごみの始末を考えれば、想像するのにもばかばかしい。仮に二酸化炭素が地球温暖化の原因だというのであれば、原子力だけはやってはいけない。

地球の生命環境が直面している脅威には大気汚染、海洋汚染、森林破壊、酸性雨、砂漠化、産業廃棄物、生活廃棄物、環境ホルモン、マイクロプラスチック、放射能汚染、さらには貧困、戦争など多数ある。それらはいずれも、資本主義の下、抑制のきかない大量生産、大量消費を続けてきた結果である。たしかに地球温暖化も脅威の一つであり、その原因の一部に二酸化炭素があるかもしれない。でも、それだけのことなのに、今、多くの人は二酸化炭素だけに目を奪われている。真に求められていることは、低炭素社会を目指すのではなく、エネルギー浪費社会を廃止することである。一人でも多くの消費者がそのことに気づいてくれることを私は願う。